

8)伝染性紅斑

(定義) ヒトパルボウイルスB19の感染による紅斑を主症状とする発疹性疾患である。

令和5年の伝染性紅斑は、小児科定点医療機関から64人(累積定点当たり報告数1.22)の報告があり、令和4年(40人)より24人多かった。年間で第43週(0.12)が最高値であり、大きな流行は認められなかった(図2-8-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(1.26)は全国(0.70)の約1.8倍で、全国はほとんどの週が基線付近で推移していた(図2-8-3)。保健所別では、始良、鹿児島市、加世田の順に(図2-8-2)、年齢別では、1歳(26.6%)、2歳(23.4%)、3歳(20.3%)の順に多かった(図2-8-4)。

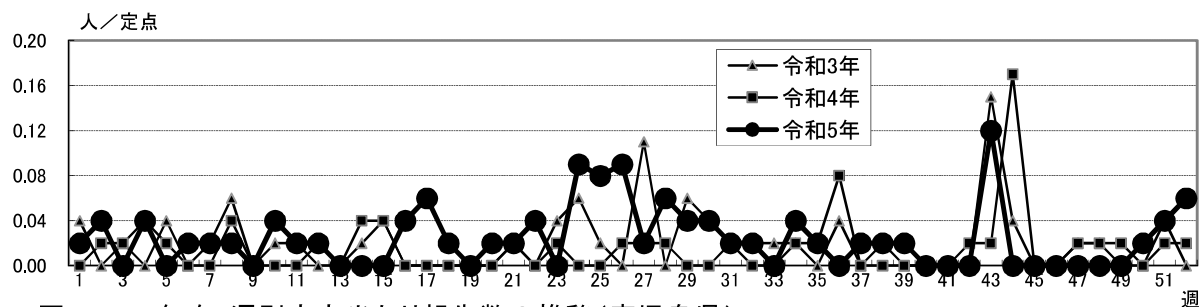


図2-8-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

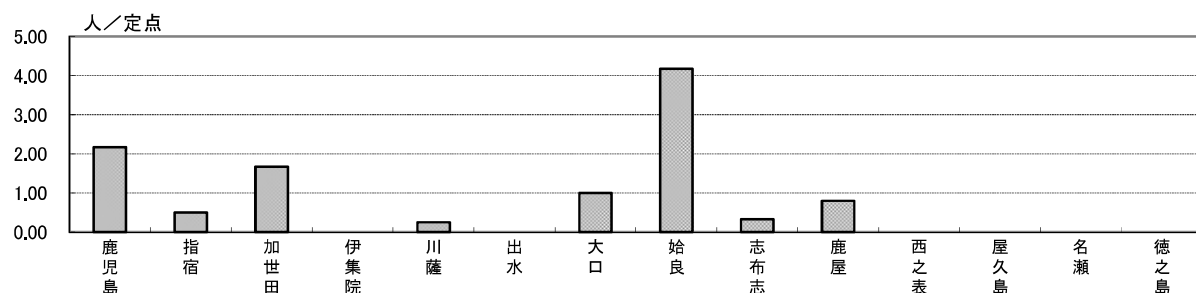


図2-8-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

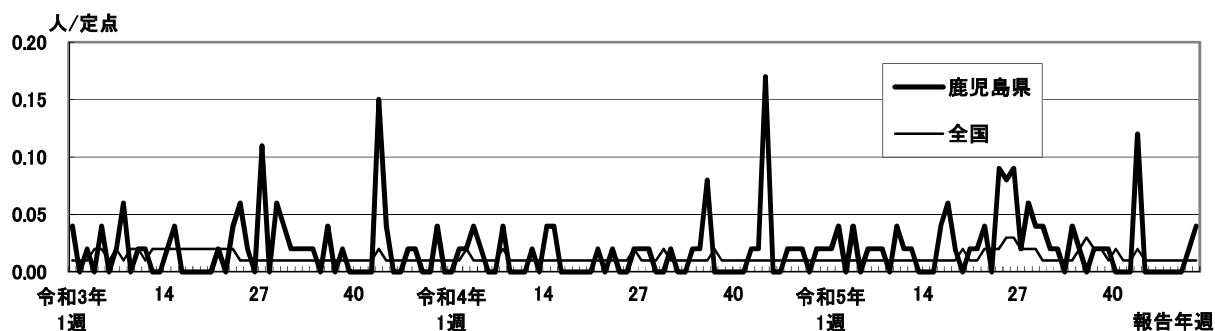


図2-8-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

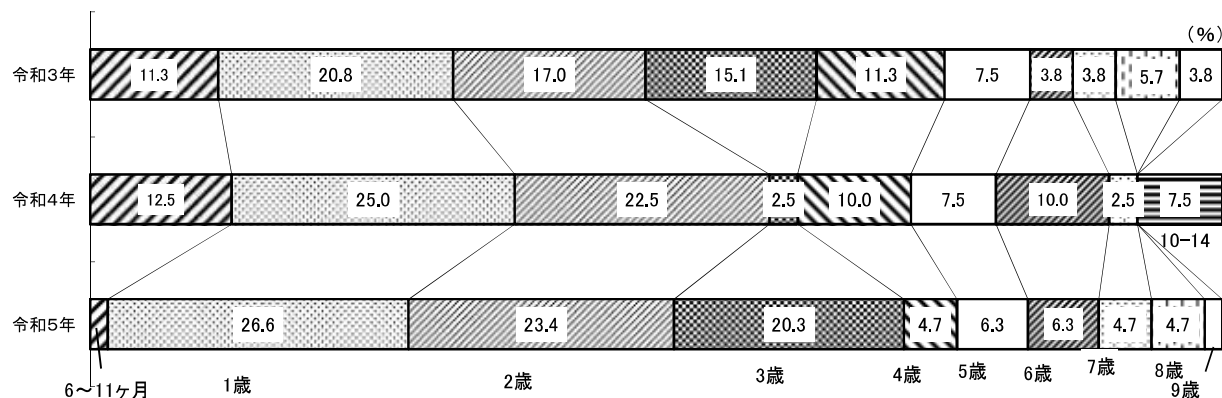


図2-8-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

9)突発性発しん

(定義) 乳幼児がヒトヘルペスウイルス6, 7型の感染による突然の高熱と解熱前後の発疹を来す疾患である。

令和5年の突発性発しんは、小児科定点医療機関から836人(累積定点当たり報告数15.89)の報告があり、令和4年(1,009人)より173人少なかった。年間では第22週(0.55)が最高値であった(図2-9-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(15.87)は全国(12.99)の約1.2倍であった(図2-9-3)。保健所別では、鹿児島市、始良、川薩の順に多く(図2-9-2)、年齢別では、1歳(60.6%)、6～11ヵ月(20.5%)、2歳(13.5%)の順で、1歳以下が全体の約82%を占めた(図2-9-4)。

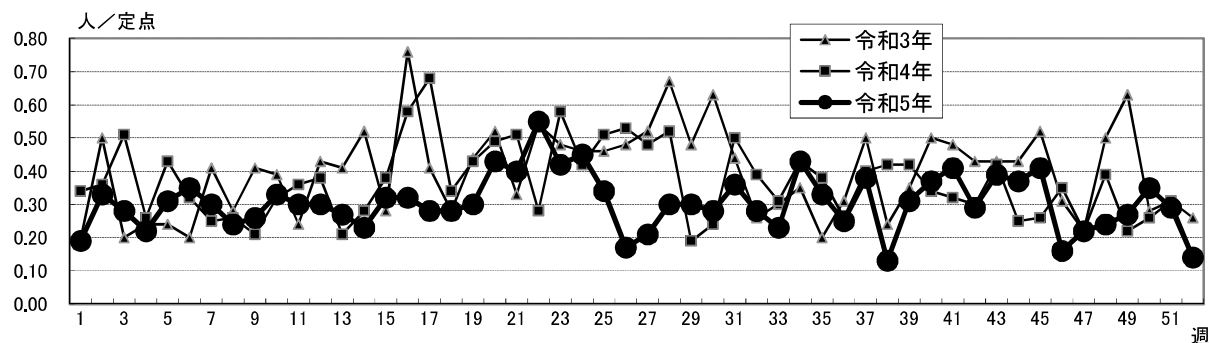


図2-9-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

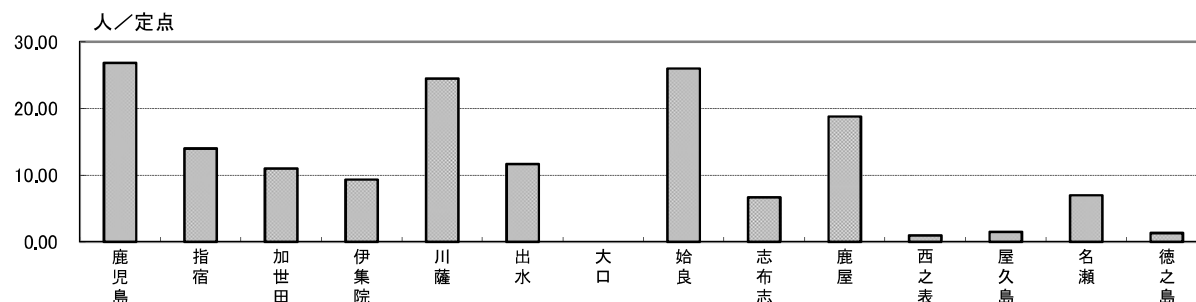


図2-9-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

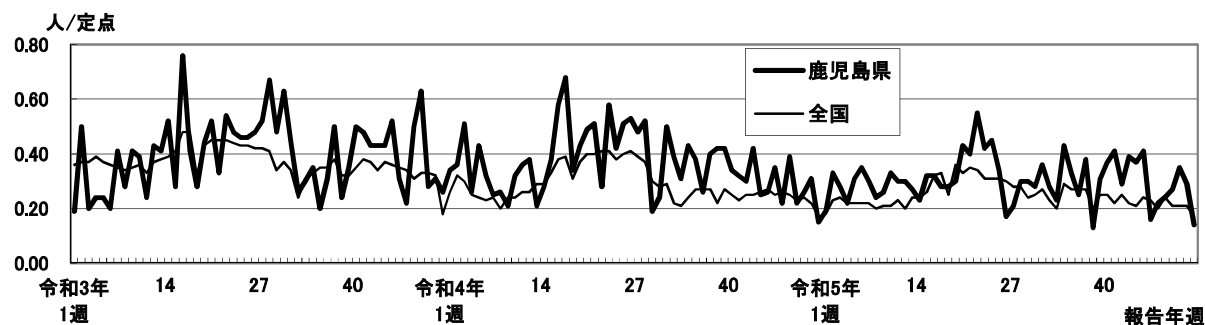


図2-9-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

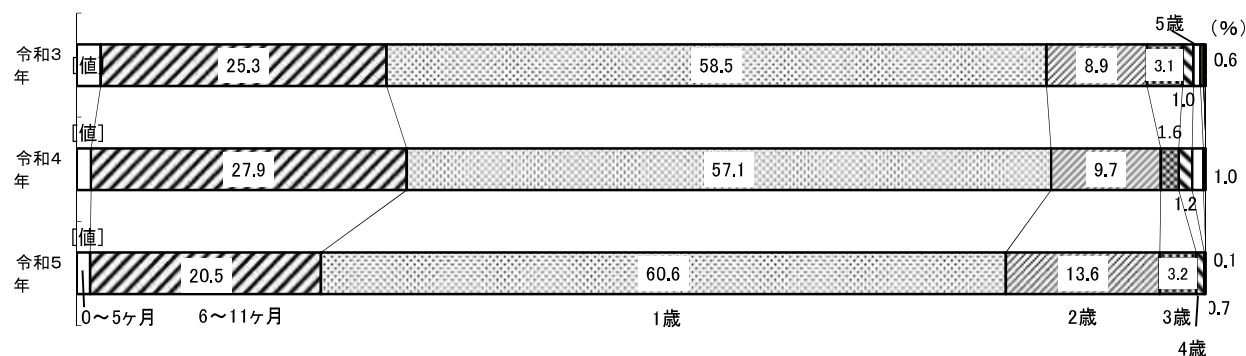


図2-9-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

10)ヘルパンギーナ

(定義) 主にコクサッキーウイルスA群による口咽部に特有の小水泡と発熱を主症状とする夏かぜの一種である。多くは、コクサッキーウイルスA群2～8, 10, 12型、まれにその他のエンテロウイルスも病原として分離されることがある。

令和5年のヘルパンギーナは、小児科定点医療機関から5,329人(累積定点当たり報告数101.27)の報告があり、令和4年(753人)より4,576人多かった。第25週(12.25)をピークに大きな流行がみられた(図2-10-1)。保健所別では、鹿児島市、鹿屋、川薩の順に(図2-10-2)、年齢別では1歳(24.4%)、2歳(20.9%)、3歳(16.4%)の順に多く、3歳以下の報告数は全体の約70%を占めた(図2-10-4)。

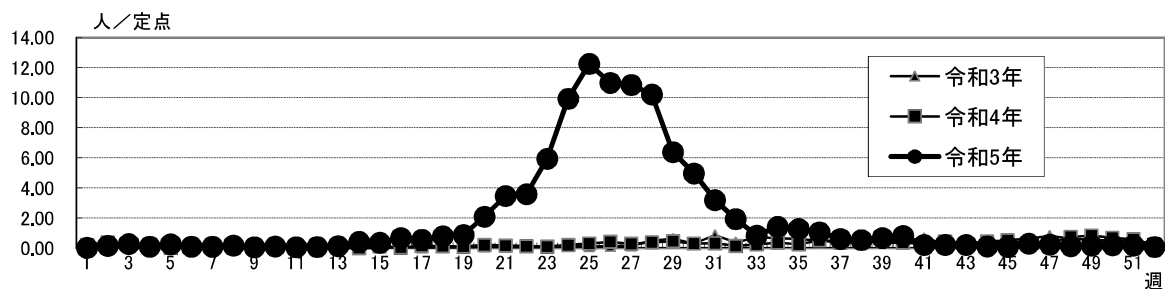


図2-10-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

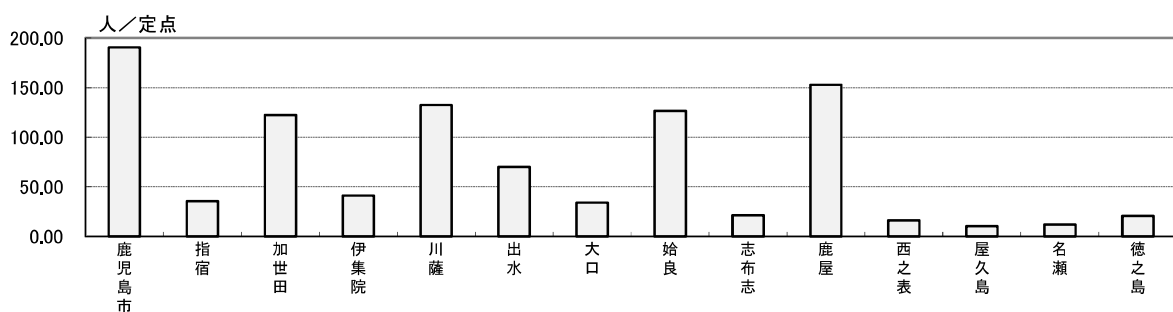


図2-10-2 定点別報告数(令和5年保健所別)

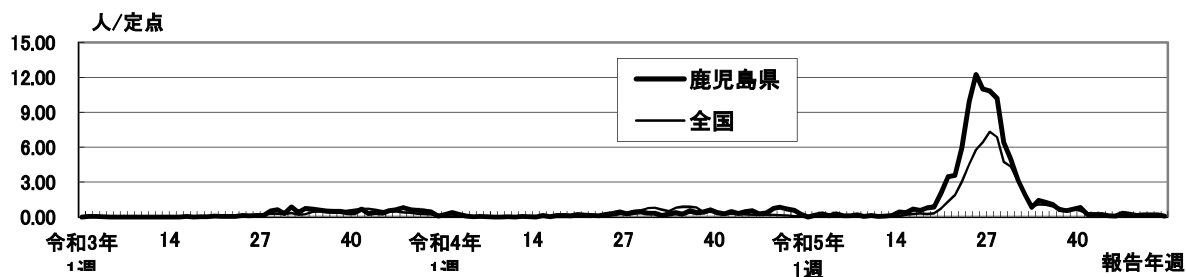


図2-10-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

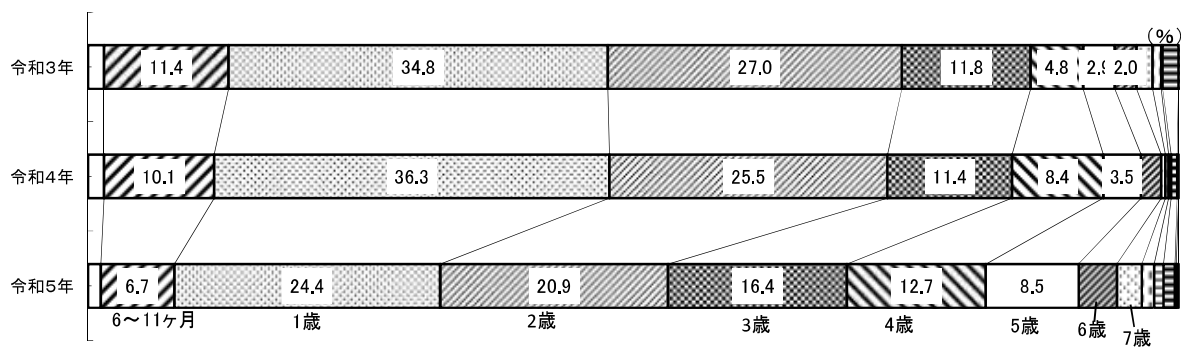


図2-10-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

11)流行性耳下腺炎

(定義) ムンプスウイルス感染により耳下腺が腫脹する感染症である。

令和5年の流行性耳下腺炎は、小児科定点医療機関から165人(累積定点当たり報告数3.14)の報告があり、令和4年(112人)より53人多かった(図2-11-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(3.17)は全国(2.19)の約1.4倍であった(図2-11-3)。保健所別では、指宿、鹿児島市、鹿屋の順に(図2-10-2)、年齢別では、5歳(15.8%)、4歳(13.9%)、7歳(13.3%)の順に多かった(図2-11-4)。

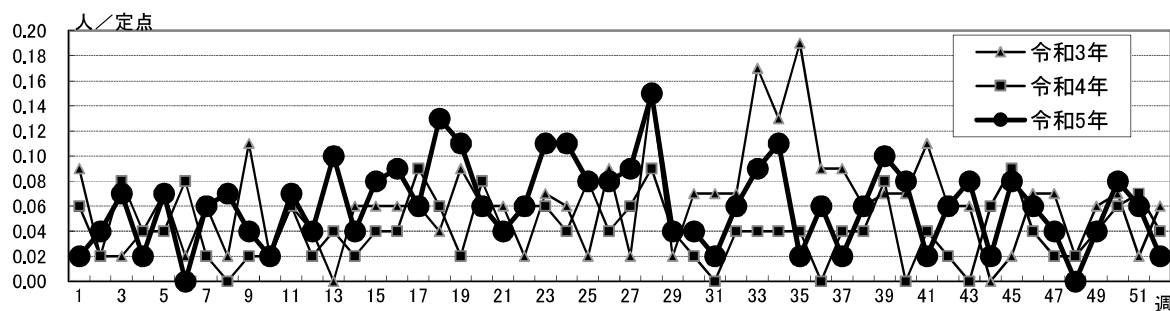


図2-11-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

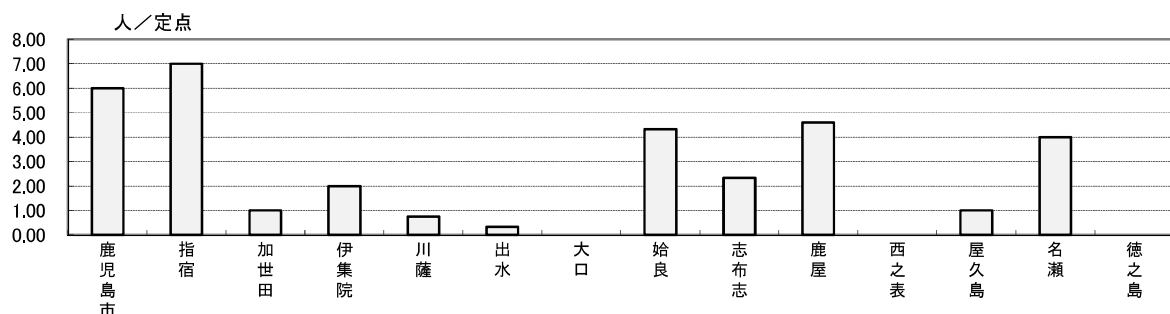


図2-11-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

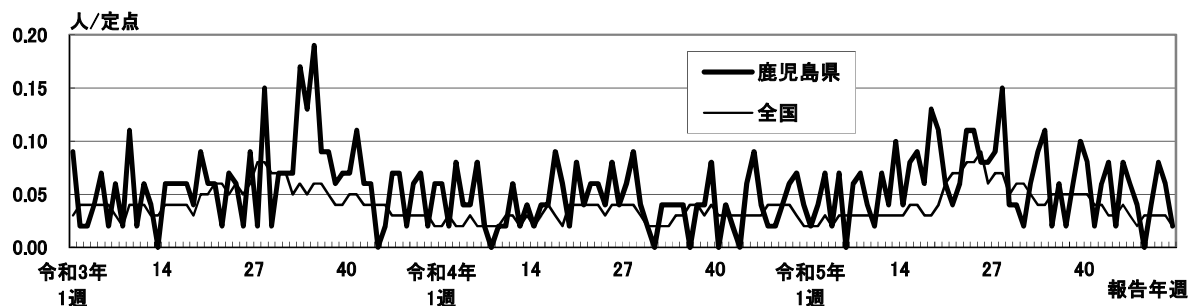


図2-11-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

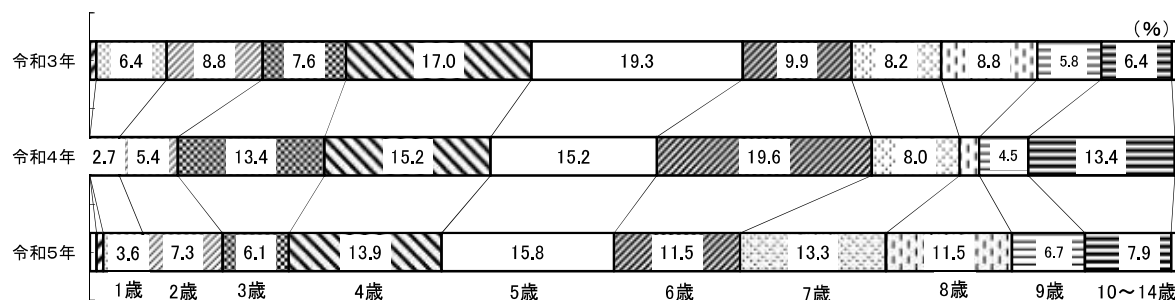


図2-11-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

12)RSウイルス感染症

(定義) RSウイルス(respiratory syncytial virus)による急性呼吸器感染症である。乳児期の発症が多く、特徴的な病像は細気管支炎、肺炎である。

令和5年のRSウイルス感染症は、小児科定点医療機関から4,307人(累積定点当たり報告数81.85)の報告があり、令和4年(1,379人)より2,928人多かった(図2-11-1)。本県は令和3年の後半から令和4年初頭にかけて大きな流行がみられた。累積定点当たり報告数をみると本県(81.25)は全国(46.35)の約1.3倍で推移した(図2-12-3)。保健所別では、大口、出水、鹿児島市の順に多く(図2-12-2)、年齢別では、1歳(36.4%)、2歳(21.2%)、6～11ヶ月(14.0%)の順に多く、1歳以下の報告数が全体の約63%を占めた(図2-12-4)。

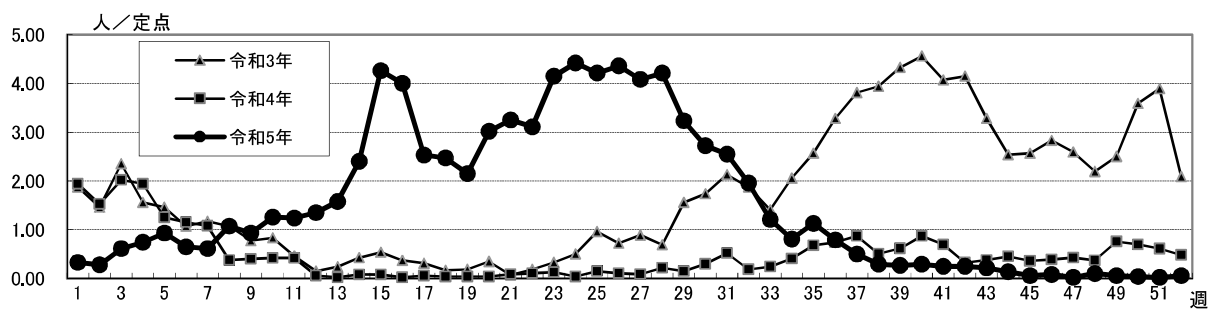


図2-12-1 年次・週別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

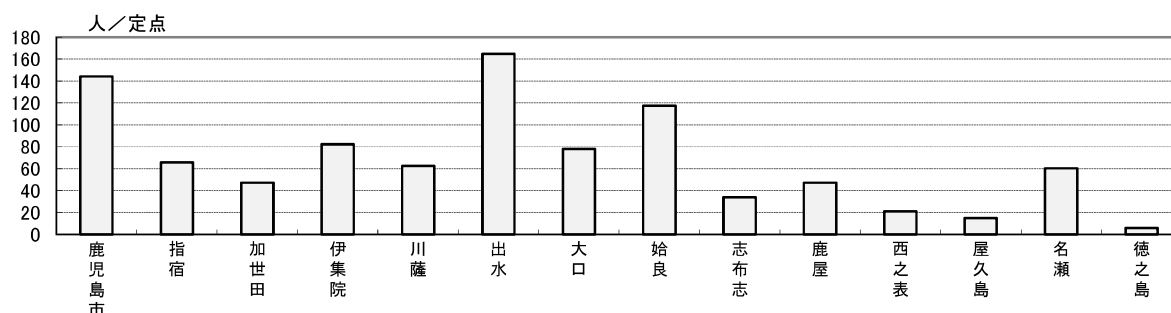


図2-12-2 定点当たり報告数(令和5年保健所別)

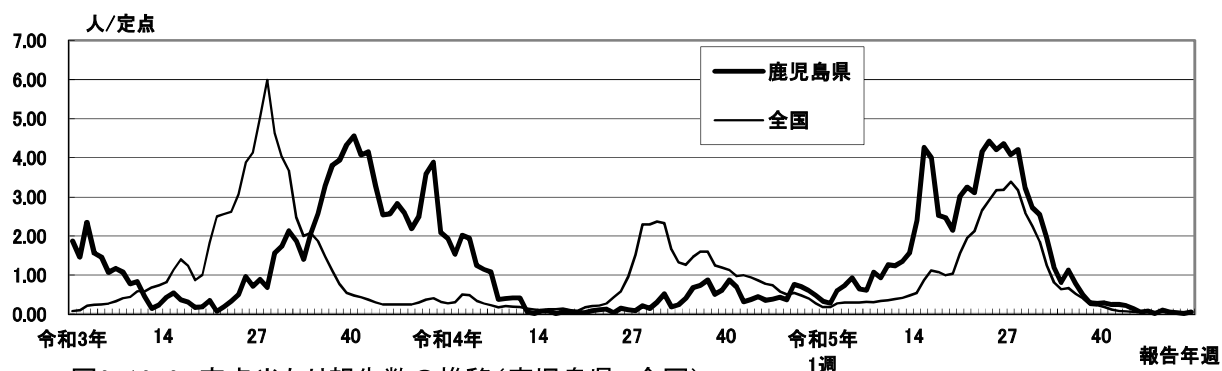


図2-12-3 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

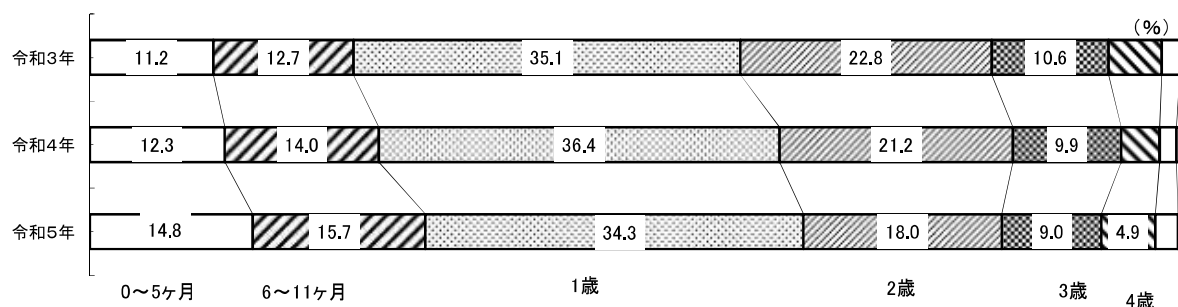


図2-12-4 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)